doi：10.20776/S13482084-69-P159
千葉大学教育学部研究紀要　第69巻　159～169頁（2021）

東京都外に設置されている区立健康学園・病弱特別支援学校における教育活動の特色
―対象とする病気・沿革・教育目標・心理支援に着目して―

田中　亮[1)]　平田　正吾[2)]　奥住　秀之[3)]
[1)]長野県塩尻市立塩尻東小学校
[2)]千葉大学
[3)]東京学芸大学

The Characteristics of Education at the Ward-established "Kenko Gakuen" and Special Needs School for the Physically Challenged Outside of Tokyo
―A look at the pathologies they target, and their histories, educational goals, and psychological support―

Ryo Tanaka[1)]　Shogo Hirata[2)]　Hideyuki Okuzumi[3)]
[1)]Shiojiri Higashi Elementary School, Shiojiri City, Nagano Prefecture
[2)]Chiba University
[3)]Tokyo Gakugei University

これまで取り上げられることの少なかった東京都外に設置されている区立健康学園・病弱特別支援学校に着目し，その概要と特色を学校要覧等の資料や聞き取りにより調査を行った。結果を整理，検討したところ，これまで長い歴史の中で学習指導や生活指導の実践・研究の構築がなされてきていることが明らかとなった。現代においても，病弱教育の意義に即した教育目標が掲げられ，その具現化を目指して，学園・学校独自の特色を活かした児童の病気や教育的ニーズ・困難に合わせた教育が行われていることが明らかとなった。

This paper focuses on the often overlooked Ward-established Kenko Gakuen and special needs schools, with research via interviews and documentary research using school directories, etc., to gain an understanding of the purpose and characteristics of each school, and careful organization and consideration of the results. We revealed the study and life instruction they provide is the result of the research and practice they have conducted over their long histories. They continue to utilize educational goals suited to special needs education, and use the unique characteristics of their schools to overcome the difficulties and meet the educational needs required by the conditions of their students.

キーワード：健康学園（Kenko Gakuen），病弱特別支援学校（Special needs schools），転地療養（health resort therapy），教育目標（educational goals），心理支援（psyochological support）

1．はじめに

1．1．転地療養型の教育形態をとる学園・学校の成り立ちと現状

現在，東京都の一部の特別区は，千葉県の房総半島や静岡県の伊豆半島など自然豊かな地において，「病気や身体虚弱の児童が自然に囲まれた空気のきれいな土地で生活を送ることで，健康維持を行う」という目的で，転地療養を必要とする病弱児・身体虚弱児を教育対象とした寄宿舎を併設した学校を設置している（全国特別支援学校病弱教育校長会，2020）。これらの学校は，区内にある小学校の病弱・身体虚弱特別支援学級として設置され，健康学園と呼ばれている学校と区立の病弱特別支援学校として設置されている学校の二つの形態がある。本稿では，これらの学級・学校を総称して，区立健康学園・病弱特別支援学校とする。

このような転地療養型の教育形態をとる学校の起源は古く，明治時代後半に遡る。当時，「体が弱い児童は，結核等の病気にかかる可能性が高い」という考えから，身体虚弱児に対する健康増進，体力向上を目的に，休暇を利用してそれらの子どもたちを集めた休暇集落で特別指導が行われた。休暇集落の実績により，身体虚弱児に林間，臨海の地で長期間，計画的な教育を行うことが効果的であるという認識がなされるにつれ，そのための学校等が全国各地に整備されるようになった（日本育療学会，2019）。

その後，昭和の時代に入ると，前半には，結核などの病気による転地療養に加え，健康学園においては戦災孤児等の受け入れを行うようになった。後半には，東京都心の急速な都市化・工業化による空気汚染・じん肺問題

連絡先著者：田中 亮　tanaryo@u-gakugei.ac.jp

や生活習慣の変化といった社会的な情勢の変化の影響から，喘息や肥満の児童も健康学園における教育の対象として加わっていった。このような経緯を経て，東京都外における転地療養型の教育形態は，従来の健康学園型の病弱身体虚弱特別支援学級に加えて，区立の病弱特別支援学校も設置されるようになり，在籍児童数はさらに増加していった。平成の時代に入ると，最盛期とも言える状況となり，このような教育形態の学校・学級は23校確認されている（森田・池本，2014）。

しかし，平成の後半に入ると，健康学園は，徐々に廃園が相次ぎ，学園数は減少していった。廃園理由としては，病気治療の方針・方法の変化，家庭での療養を望むケースの増加による転学を希望する児童の激減，設置者である区の財政的問題，学園・学校の建物の老朽化，都内からの教職員配置の困難等が挙げられている（森田・池本，2014）。本論文執筆段階では，区立健康学園が１園，区立病弱特別支援学校が３校現存している。

１．２．区立健康学園・病弱特別支援学校における教育的成果

区立健康学園・病弱特別支援学校においては，特徴的な教育形態のもと，連綿と実践を蓄積してきた長い歴史がある。その中で，教育的成果に関する報告はいくつかある。前田（2000）は，区立健康学園・病弱特別支援学校における指導事例，当事者・教職員の語りを集め，病弱児・身体虚弱児一人ひとりの健康課題に寄り添い，教育的ニーズに合わせた自立活動，教科学習の少人数指導を実践している点に着目し，生涯に渡って必要な生活する力や学力を向上することにつながっている可能性を指摘している。上野（2019）は，東京都心で生活してきた病弱児・身体虚弱児が，学園・学校周辺の豊かな自然に触れ，そのような中で学校生活を送ることにより，児童の思考力・半産力を養うことにつながっていることに言及している。田中・斎藤・奥住（印刷中）は，現存する区立健康学園・病弱特別支援学校における教育活動に関する調査を行った結果，各校周辺の自然環境や地域住民との協力を基盤とした教育課程を編成することにより，健康課題や学校不適応の改善，将来的自立につながる基本的な生活習慣の確立，自己肯定感の向上といった教育的成果があることを明らかにしている。

また，大谷・岡田（2005）は，家庭での療養を望むケースが増加している一方では，児童を取り巻く生活環境の悪化や養育能力の不足する家庭の増加などの社会的情勢の大きな変化がある現状を鑑みると，寄宿舎による転地療養型の教育という形態を必要とする児童が一定数存在している可能性を問題提起している。加えて，田中（2020a）は，現在，増加傾向にある心身症・精神疾患に起因する学校不適応，及び，長期欠席児童の学ぶ場となっているケースが少なくない現状を指摘し，健康学園・区立病弱特別支援学校での教育活動は，今後の学校教育全体の在り方を考える視点となることを示唆している。

１．３．問題と目的

近年，東京都外において転地療養型の教育形態をとる区立健康学園・病弱特別支援学校の学校数と在籍児童数は減少の一途を著しくたどっているものの，特色ある教育課程の編成や指導・支援の展開を行うことで，社会的・教育的ニーズに合わせた教育的意義を持つ可能性に着目した指摘は多く，今後も存続・発展していくことが望まれている。

しかし，前田（2000）は，これまで東京都外に設置されている区立健康学園や病弱特別支援学校が積み重ねてきた教育実践とその成果は，当事者である児童，保護者，勤務する教職員以外に知られることは少なく，実際には，在籍人数や在籍期間の少なさのみが注目されることが多く，教育の実態に関する検討はあまりなされてこなかったことを危惧している。実際に，他の特別支援学級・特別支援学校と比して，非常に特徴的な教育形態にもかかわらず，その実態について明らかにすることを目的とした先行研究は少なく，十分な検討がなされているとは言い難い。

そこで，本研究では，現存する学園・学校の概要，教育目標や沿革，特色を整理することで，今後の区立健康学園・病弱特別支援学校の教育的意義や効果について着目していくための基礎的資料とすることを目的とした。

２．手続き

２．１　調査対象と調査期間

東京都外において転地療養型の教育形態をとる区立健康学園・病弱特別支援学校４校のすべてに本稿第一筆者が訪問し，資料収集ならびに，学校長または副校長４名を調査対象とした聞き取り調査を行った。調査にあたり，学園長及び学校長に研究の趣旨を伝え，協力を依頼し，承諾を得た上で，調査を行った。訪問による調査期間は，2018年２月上旬から３月下旬，資料収集は，2018年２月上旬から2020年10月上旬であった。

２．２　調査内容・分析方法

調査内容は，⑴「学校・学園の概要」（開校日・対象とする病理型・対象とする学年・学校教育目標）⑵「学校の沿革」⑶「学校・学園の教育課程上の特色ある教育活動」である。

分析方法については，⑴⑵については，収集した資料や公開されている調査対象校のホームページをもとに整理・分類した。⑶については，「学園・学校における教育課程上の特色ある教育活動はどのようなものがありますか」という質問に対する調査参加者の口頭による回答を筆頭筆者が記録した。その上で，４校の回答を合わせて，整理・分類を行った。

３．結果

３．１．学園・学校の概要

現存する区立健康学園・病弱特別支援学校各校の学校要覧・ホームパージ等で公表されている学校の概要については，表１のとおりであった（中央区立宇佐美学園，2017；中央区立宇佐美学園，2020；板橋区立天津わかし

お学校，2018；板橋区立天津わかしお学校，2020；葛飾区立保田しおさい学校，2018；葛飾区立保田しおさい学校，2020；大田区立館山さざなみ学校，2018；大田区立館山さざなみ学校，2020）。所在地については，千葉県内に３校，静岡県内に１校，それぞれ所在していた。開校年については，区立健康学園型の学校が1937（昭和12）年で最も早く，区立病弱特別支援学校型の学校が，1967（昭和42）年から1983（昭和57）年の間であった。区立病弱特別支援学校型の全ての学校において，前身は，区立健康学園型であった。そのうち，２校が他の地域から現在の所在地へと移転した上で開校しており，１校が現在の所在地と同じ地点で開校していた。対象学年については，全ての学園・学校において３～６年生であった。

表１　現存する区立病弱特別支援学校・健康学園の概要

	学校名	所在地	開　校　年 （前身の学校の開園年）
健康学園型 （病弱・身体虚弱特別支援学級）	中央区立宇佐美学園 （中央区立城東小学校病弱・身体虚弱特別支援学級）	静岡県伊東市	1937（昭和12）年
区立病弱特別支援学校型	板橋区立天津わかしお学校	千葉県鴨川市	1967（昭和42）年 （1952（昭和27）年　板橋区立大磯学園）
	葛飾区立保田しおさい学校	千葉県安房郡鋸南町	1968年（昭和43）年 （1952（昭和27）年　葛飾区立保田養護学園）
	大田区立館山さざなみ学校	千葉県館山市	1983（昭和57）年 （1939（昭和14）年　大田区立宇佐美養護学園）

３．２．対象とする病気

現存する区立健康学園・病弱特別支援学校各校の学校要覧・ホームページ等で公表されている在籍の対象とされている病気は表２のとおりであった（中央区立宇佐美学園，2017；中央区立宇佐美学園，2020；板橋区立天津わかしお学校，2018；板橋区立天津わかしお学校，2020；葛飾区立保田しおさい学校，2018；葛飾区立保田しおさい学校，2020；大田区立館山さざなみ学校，2018；大田区立館山さざなみ学校，2020）。全ての学校で喘息，肥満，虚弱あるいは，虚弱に類すると見なし得る病弱や体調不良などが挙げられていた。他には，偏食や心身の不調を挙げている学校もあった。

表２　現存する区立病弱特別支援学校・健康学園の在籍対象とする病気

	学校名	在籍の対象とする病気
区立病弱特別支援学校型	板橋区立天津わかしお学校	喘息、肥満、偏食・少食、体調不良
	葛飾区立保田しおさい学校	喘息、肥満、アレルギー、病弱、心身の不調
	大田区立館山さざなみ学校	喘息、肥満、偏食、病弱体質改善
健康学園型 （病弱・身体虚弱特別支援学級）	中央区立宇佐美学園 （中央区立城東小学校病弱・身体虚弱特別支援学級）	喘息、肥満、虚弱等

３．３．学園・学校の教育目標

現存する区立健康学園・病弱特別支援学校各校の学校要覧・ホームページ等で公表されている教育目標は表３のとおりであった（中央区立宇佐美学園，2017；中央区立宇佐美学園，2020；板橋区立天津わかしお学校，2018；板橋区立天津わかしお学校，2020;葛飾区立保田しおさい学校，2018；葛飾区立保田しおさい学校，2020；大田区立館山さざなみ学校，2018；大田区立館山さざなみ学校，2020）

３．４．各学園・学校の沿革

表４は，中央区立宇佐美学園の沿革，表５は，板橋区立天津わかしお学校の沿革，表６は，葛飾区立保田しおさい学校の沿革，表７は，大田区立館山さざなみ学校の沿革についてまとめたものである。これらの沿革については，それぞれの各学園・学校の学校要覧やホームページ等において公表されている資料を参照して，本稿第一筆者が作成したものである（中央区立宇佐美学園，2017；中央区立宇佐美学園，2020；板橋区立天津わかしお学校，2018;板橋区立天津わかしお学校，2020；葛飾区

表３　現存する区立病弱特別支援学校・健康学園の学校教育目標

	学校名	学校教育目標
区立病弱特別支援学校型	板橋区立天津わかしお学校	「健康な子」 体力、学力、自信をつける
	葛飾区立保田しおさい学校	「心も体も健やかでたくましい子」 ・進んで体をきたえる子 ・よく考えてやりぬく子 ・仲よく助け合う子
	大田区立館山さざなみ学校	「健やかでたくましく,そして,心豊かな子供を育てる」 ・ よく考え工夫する子供 ・ 思いやりがあり助け合う子供 ・ どこまでもやりぬく子供 ・ 明るく丈夫な子供
健康学園型 （病弱・身体虚弱特別支援学級）	中央区立宇佐美学園 （中央区立城東小学校病弱・身体虚弱特別支援学級）	・じょうぶになろうと努力する子（健康） ・自ら考え進んで努力する子（社会性） ・人を愛し自然を愛する子（自立） ・学び合い高め合う子（学習）

立保田しおさい学校，2018；葛飾区立保田しおさい学校，2020；大田区立館山さざなみ学校，2018；大田区立館山さざなみ学校，2020）。なお，学校長の就任，所在している自治体の合併に伴う住所変更等，本研究に直接的に関与しないと判断する内容は除いてある。

表４　中央区立宇佐美学園　沿革

年	月	内容
1937（昭和12）	10	京橋区立宇佐美健康学園として開園
1944（昭和19）	3	第１学期より都の疎開事業 名称は京橋区健康学園のままで第一次京橋区国民学校児童集団疎開に切替。 160名の学童を収容。
1944（昭和19）	8	第２学期より第二次学童集団疎開 東京都京橋区国民学校宇佐美疎開学園に名称変更。 臨海部に301名，林間部に150名，計451名を収容。
1945（昭和20）	6	埼玉県へ再疎開，一時休園
1946（昭和21）	11	再び開園
1947（昭和22）	8	東京都中央区立宇佐美健康学園と改称
1951（昭和26）	4	東京都中央区立宇佐美学園と改称
1953（昭和28）		学園歌制定
1957（昭和32）	10	開園20周年記念式典挙行
1958（昭和33）	9	台風22号（狩野川台風）により建造物被災流失。東京都中央区立臨海学園に移転。
1961（昭和35）	6	新寮舎完成。その後，新校舎・体育館も続いて完成。
	12	宇佐美学園再建竣工，落成式挙行
1967（昭和42）	10	学園専用道路完成・普通教室増築
1968（昭和43）	3	開園30周年記念式典挙行
1970（昭和45）	12	新寮母室完成（保健室，寮母室，職員浴場，作業員宿舎）
1972（昭和47）	2	中央区研究奨励校，東京都公立養護学園研究協力校として研究成果を公開。 研究主題は「心身ともに健康な生活を進めるため」。
	9	理科室，厨房改修，洗濯室の新設完成
1973（昭和48）	10	園章，学園旗を制定
1977（昭和52）	10	開園40周年記念式典挙行。区立小学校に宇佐美の木（みかん）二株贈呈。 開園記念時計台を設置。
1978（昭和53）	11	東京都病弱虚弱教育研究協議会協力校として研究成果を公開。 研究主題は「都市児童の人間性向上をめざして」。
1981（昭和56）	8	寮舎・保母室新築完成。
1985（昭和60）	8・9	校舎・体育館・食堂・厨房・浴室棟改築完成。
1986（昭和61）	3	運動場・プール等外構工事完成
1987（昭和62）	5	寮南隣接地を教材園として活用

	10	開園50周年記念式典挙行
1991（平成３）	4	東京都病弱虚弱教育研究協議会湘南地区研修会 開催
	8	校庭改修。校庭北側隣接地に教材園を新設
1996（平成８）	4	東京都病弱虚弱教育研究協議会湘南地区研修会 開催
1997（平成９）	10	開園60周年記念式典挙行
2001（平成13）	5	東京都病弱虚弱教育研究協議会湘南地区研修会 開催
2003（平成15）	2	開園65周年記念行事を開催。
2004（平成16）	8	東京都病弱虚弱教育研究協議会湘南地区研修会 開催
2006（平成18）	6	みかん栽培学習開始
2008（平成20）	2	開園70周年記念式典挙行。うさみ桜植樹
2010（平成22）	6	教室冷暖房設置
	8	園庭改修工事完成
	11	校舎棟外壁塗装工事及び屋上防水改修工事完了
2013（平成25）	3	開園75周年記念制作完成
2018（平成29）	12	開園80周年記念式典

表５　板橋区立天津わかしお学校　沿革

年	月	内　　容
1952（昭和27）	4	前身の板橋区立大磯学園　開園
1967（昭和42）	4	板橋区立天津養護学校　開校
	7	開校式　挙行
1971（昭和46）	12	児童宿舎３階完成
1977（昭和52）	10	創立10周年記念式典挙行
1979（昭和54）	3	体育館・プール竣工
1983（昭和58）	11	昭和58年度　東京都健康優良学校として表彰
	11	昭和58年度　東京都健康優良学校として表彰
1984（昭和59）	2	特別教室（音楽・図工・家庭・図書）完成
1984（昭和59）	2	昭和59年度　板橋区健康努力校　受賞
	2	昭和59年度　板橋区よい歯の努力校　受賞
1987（昭和62）	11	創立20周年式典挙行
1990（平成２）	4	平成元年度　板橋区健康努力校　受賞
1991（平成３）	3	平成元・２年度　板橋区教育委員会研究奨励校（体育） 研究発表会「自ら課題をもって体力づくりに励む児童の育成」
1992（平成４）	11	平成４年度　東京都学校保健優良学校として表彰
1995（平成７）	2	平成５・６年度　板橋区教育委員会研究奨励校（国語） 研究発表会「豊かに自己を実現できる児童の育成」
	11	天津小湊町と災害時相互援助協定を締結
2001（平成13）	2	板橋区教育委員会研究奨励校（総合的な学習の時間） 研究発表会「豊かな心で主体的に活動する児童の育成」
2004（平成16）	2	板橋区教育委員会研究奨励校（自立活動） 研究発表会「児童の心の安定を図るための教育の推進－自立活動を中心として－」
2006（平成18）	4	「東京都板橋区立天津わかしお学校」と校名変更
2007（平成19）	9	第５回全日本ホームページ大賞優秀賞表彰(２年連続)
	11	創立40周年記念式典挙行
2008（平成20）	4	平成19・20年度　板橋区教育委員会研究奨励校（国語） 研究発表会「子どもの自信を育む指導の工夫－国語　伝え合う学び・活動を通して－」
2009（平成21）	1	平成19・20年度　板橋区教育委員会教育研究グループ奨励校（健康教育） 「これからの健康教育の在り方について－運動・食育・生活リズムの連動とその効果－」
2012（平成24）	2	東京都教育委員会「平成23年度生活習慣や運動習慣に関する実践研究校」実践報告会
2014（平成26）	2	板橋区青少年表彰（なかよし会）

	4	オリンピック教育推進校　委嘱
2016（平成28）	2	東京都教育委員会児童・生徒表彰（なかよし会）
	4	板橋区教育委員会「子どもの健康づくり事業」研究推進校委嘱
2017（平成29）	11	創立50周年記念式典挙行
	12	学校情報化優良校認定
2018（平成30）	1	東京都学校歯科保健優良校表彰（10年連続）

表６　葛飾区立保田しおさい学校　沿革

年	月	内　　容
1952（昭和27）		前身の葛飾区立保田養護学園　開園
1968（昭和43）	4	葛飾区立保田養護学校　開校
	9	新校舎完成移転
1970（昭和45）	10	校歌制定
1971（昭和46）	12	関東甲信越虚弱教育研究協議会発表校
1977（昭和52）	11	創立10周年記念式典挙行
1978（昭和54）		校章制定
1988（昭和63）	11	創立20周年式典挙行
1994（平成６）	4	葛飾区教育委員会研究奨励校（～８年度）
1998（平成10）	10	創立30周年式典挙行
2000（平成12）	5	あわ夢まつり出演始まる
2001（平成13）	2	鋸南町長杯サッカー大会参加始まる
	11	鋸南町文化祭出演始まる
2002（平成14）	4	葛飾区子どもまつり出演始まる
2007（平成19）	1	東京都小学校連合学芸会出演
2008（平成20）	4	葛飾区立「保田しおさい学校」と校名変更・新校章制定
		鋸南町桜まつり参加始
	７～11	耐震補強工事並びに寄宿舎改修工事
	11	創立40周年記念式典挙行
2009（平成21）		葛飾区教育委員会研究指定校（～22年）
	6	鋸南町善行表彰受章
2010（平成22）	10	葛飾区教育委員会研究指定校研究発表
2011（平成23）	1	東京都小学校連合学芸会出演
		東京都教育委員会スポーツ教育推進校及び 「１日60分運動・スポーツ」小学校総合運動部活動実践モデル校
2014（平成26）	4	東京都教育委員会オリンピック教育推進校及び葛飾区教育委員会研究指定校
2018（平成30）	11	創立50周年記念式典挙行

表７　大田区立館山さざなみ学校　沿革

年	月	内　　容
1939（昭和14）	4	前身の大田区立宇佐美養護学園　開園
1982（昭和57）	1	大田区立館山養護学校　開校
1983（昭和58）		開校記念日・11月19日に制定
	11	校章デザイン完成
1984（昭和59）	2	校歌完成
1985（昭和60）	2	地域の小学校とサッカー交流開始
1986（昭和61）	7	親子健康教室開始
1987（昭和62）	6	校庭整備完了
	11	開校５周年記念式典挙行
1988（昭和63）	12	大田区教育委員会研究奨励校発表実施（健康安全教育）

1989（平成元）	7	親子教室を健康教室に名称変更
1992（平成４）	11	開校10周年記念式典挙行
1996（平成８）	2	第１回体験入学実施
1997（平成９）	11	開校15周年記念式典挙行
		大田区教育委員会研究奨励校発表実施（国語科）
1998（平成10）	6	第５学年移動教室開始
1999（平成11）	11	大田区教育委員会研究奨励校発表実施（健康教育）
2002（平成14）	5	第５学年移動教室・地域の小学校と合同実施
	9	第１回道徳授業地区公開講座開催
	11	開校20周年記念式典挙行
2007（平成19）	3	教室・寄宿舎エアコン設置完了
	4	「大田区立館山さざなみ学校」へ校名変更
	11	開校25周年記念式典挙行
2008（平成20）	9	寄宿舎宿泊行事実施
2009（平成21）	4	目黒区興津健康学園の閉園に伴い，児童６名受け入れ
2012（平成24）	7	大田区館山サマーキャンプ実施
	11	開校30周年記念式典挙行
2017（平成29）	11	開校35周年記念集会実施
	12	各教室に電子黒板・タブレット端末配置完了

３．５．学校・学園としての特色ある教育活動

表８は，現存する区立健康学園・病弱特別支援学校の各校が特色として挙げている教育活動の共通する内容ごとに整理し，項目ごとに分けたものである。

表８　区立健康学園・病弱特別支援学校が挙げた特色ある教育活動　　（　）は校数・特記ない場合は1校

項目		具体的内容
海・山の自然を活かした活動	（海）	海水浴
		磯観察
		海辺の自然観察
		干物づくり
		ウミガメ移動教室
		ボディーボード体験
	（山）	学校周辺の山での自然観察
栽培活動		畑・田んぼの栽培学習
		みかん栽培学習
		給食指導と関連させた栽培学習
食に関する指導		食事のマナーや目標を振り返る給食指導
		食事指導（朝食の小盛り・目に見てわかる残食グラフ・栄養バランスの均衡を保つ食事）
		バランスのよい３食と間食について知る学習
		食事指導（地元食材の積極的利用・バイキング給食の実施）
体力向上	（日常的な取り組み）	日常的なマラソン・持久走（校地内・学校周辺・海岸線）
		ヨガ
		寒風摩擦
		日常的な体力トレーニング
	（行事的な取り組み）	サッカー大会
		持久走大会
		18㎞ウォーキング
		ハイキング
		寮別対抗駅伝大会

	全校遠足
自立活動	健康課題別の自立活動
	月に１回の養護教諭による保健指導
地域（立地している自治体）との交流	地域のサッカーチームとの交流
	地域のお祭りへの参加
	地元農家での収穫体験
	地域の学校との合同スポーツ大会
	地域のかるた大会への参加
	地域の合唱団との交流学習
都内学校・居住地域との交流	都内で行う校外学習
	区内のお祭りへの参加
	前籍校への通学期間の設定
心理的な支援	自己有用感・自己肯定感の向上を目指す活動
	他者とのコミュニケーションや人間関係を円滑にするための指導
	中学校に向けて登校が継続できるための情緒的な安定を目指す学習

各校の特色を大きく分類すると，海・山の自然を活かした活動，栽培活動，食に関する指導，体力向上，自立活動，地域との交流，都内学校・居住地域との交流，心理的支援に分類された。

具体的には，海・山の自然を活かした活動のうち，海水浴は４校全て，磯観察は２校，学校周辺の山での自然観察が２校，干物づくり・ウミガメ移動教室・ボディボード体験をそれぞれ１校ずつが挙げていた。栽培活動については，畑・田んぼの栽培学習が４校全て，みかん栽培学習・給食指導と関連させた栽培学習をそれぞれ１校ずつが挙げていた。

食に関する指導については，食事マナー，残食グラフ，栄養バランスの良い給食・間食について学ぶ学習，バイキング給食の実施，地元食材の活用など，各校それぞれが多様な指導内容を挙げていた。

体力向上については，日常的な取り組みとして，マラソン・持久走を走る場所は異なるが４校全てが挙げていた。ヨガや寒風摩擦はそれぞれ２校ずつ挙げていた。行事的な取り組みとしては，サッカー大会，持久走大会がそれぞれ２校ずつ，他にはウォーキングやハイキング，駅伝大会なども挙げられていた。

自立活動については，４校全てが健康課題別に行う自立活動の学習を挙げていた。

地域との交流については，地元サッカー大会，スポーツ大会など体育的な行事への参加や地元のお祭り，かるた大会，合唱団との交流学習など文化的な行事への参加もそれぞれ１校ずつ挙げられた。

都内・居住地域との交流については，３校が都内で行う校外学習の実施を挙げ，その他には，区内のお祭りへの参加や前籍校への通学期間を設定している学校が１校ずつあった。

なお，自己有用感の向上，他者とのコミュニケーションや人間関係を円滑にするための指導，情緒的な安定を目指す学習など心理的支援に関する取組は多くの学校で挙げられていた。

４．考察

４．１．学園・学校の概要

４．１．１．対象とする病気

在籍の対象とする病気について見てみると，全ての学園・学校が共通して，喘息，肥満を挙げていた。

喘息については，区立健康学園・病弱特別支援学校の設立経緯の中に，東京都心の急速な都市化・工業化による空気汚染・じん肺問題により喘息罹患児童が，自然に囲まれた空気のきれいな土地で生活を送ることで健康維持を行うという目的があったことが影響していると考えられた。一方，現在では，喘息は，吸入ステロイド薬が普及し，継続的に薬剤管理による発作の予防や家庭での体調管理が可能となった（宮島・椿・笹本，2019）。対象とする病気として標榜はしてあるが，実際には喘息罹患児童の在籍は，大きく減少しているという報告がある（宮島・椿・笹本，2019）。

肥満については，昭和の時代の後半から平成の時代の前半は，かつては急速な都市化の影響があったことから対象として追加されたが，現代では，肥満児童の在籍には，基本的な生活習慣の未確立の児童や生活面の支援が必要な家庭の増加の影響が推察された。

偏食児童を在籍とする学校が２校あった。偏食そのものは病気にはなり得ないが，偏食を起因として何らかの健康障害が生じている児童の存在が推察される。また，アレルギーをもつ児童を対象として掲げる学校もあり，いずれにしても，食事指導の重要性が考えられた。

この他，虚弱体質を対象としている学校が２校，また，体調不良・心身の不調を対象としている学校が２校あった。現在，小学校の通常の学級においては，心身症・精神疾患の児童や小児の生活習慣病の児童が急増しており，なおかつ，それらに起因した学校不適応の状況にある児童も相当数存在していることが現代的な病弱教育の課題として報告されている（田中，2020a）。

社会的な情勢，生活習慣の変化，入院の短期化・頻回化などの小児の健康障害に関する現代的な課題を鑑みると，対象とする病気については，従来の対象に加え，自

宅療養中の慢性疾患，精神疾患や心身症，ゲーム依存などに拡張していくことも視野に入れる必要もあるだろう。都外に設置されている区立健康学園・病弱特別支援学校は，そのような児童の教育を担う場として考えられ，現在指摘されている小学校教育や病弱教育における今日的な課題を今後，補完し得るような教育活動が展開できる可能性が推察されている。

４．１．２．教育目標

各校の教育目標について着目するにあたり，まず，その基盤となる病弱教育の意義に関して確認したい。平成６年，文部省「病気療養児の教育に関する調査研究協力者会議」により，病弱教育の意義については，⑴積極性・自主性・社会性の涵養⑵　心理的安定への寄与　⑶病気に対する自己管理能力　⑷治療上の効果等の４点が掲げられている（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所，2017）。

体力向上・健康増進に関する内容が全ての区立健康学園・病弱特別支援学校の学校教育目標において挙げられていた。これについては，学園・学校の設立経緯を鑑みると，教育活動の一番の根幹をなしているものと考えられる。病弱教育の意義と照らし合わせると，対象児童である喘息，肥満，虚弱等の児童にとっての⑶病気に対する自己管理能力⑷治療上の効果に通ずるものとみなし得るであろう。

また，「助け合う」や「自信をつける」などのキーワードが教育目標として掲げられている学園・学校も多く存在しており，他者あるいは自らの社会性の向上が重視されていることが伺える。これについては，⑴積極性・自主性・社会性の涵養⑵心理的安定への寄与に通ずるものであると推察される。家族のもとを離れて，自宅から離れた土地で，寄宿舎で生活しながら学校に通うという特殊な状況であることを考えると，教育目標の具現化に向けて学園・学校における児童に対する心理的支援の重要性も考えられる。

なお，「考え」というキーワードが３校において挙げられていた。これについては，学習指導要領の改訂に伴い，思考力・表現力・判断力の育成の重視することが文部科学省により示されていることとの関連が考えられた。病弱教育の意義としても，⑴積極性・自主性・社会性の涵養が重視されており，この点と通ずる。

いずれの学園・学校の教育目標についても，病弱教育の意義との関連性は見られ，病弱特別支援学級・学校としての役割を果たすことが教育活動全般を通して，重視されていることが伺える。

なお，教育目標は，学習指導要領の改訂，学校長の交代，周年行事等をきっかけに数年に一度変更されるものである。今後も，長期的な視点に立ち，都外に設置されている病弱特別支援学校や健康学園の学校教育目標の変化に着目していくことで，学園・学校が担う社会的使命・存在意義等が明らかになる可能性が考えられた。

４．２．沿革

各校の沿革を概観すると，2020年10月現在，区立健康学園（区立病弱特別支援学校においては，前身の健康学園を含む）としての創立以来70～80年を経ていた。長い歴史の中で脚気罹患，戦争疎開，戦後の栄養不良，病気療養等の時代とともに変化していったニーズに応じるための教育活動が行われており，これは現代の病弱教育の起源とも考え得るとする示唆と重なる（日本育療学会，2019）。

区立病弱特別支援学校型については，３校ともに共通して，房総，伊豆，湘南の各地に存在した健康学園型の病弱・身体虚弱特別支援学級が設立の前身であり，これらの学園の閉園に際し，その役目を引き継ぐ形で設立された経緯があった。さらに，平成19年から20年にかけて，ほぼ同時期に学校名を変更している。これについては，養護学校から特別支援学校への名称変更に際し，千葉県房総半島に立地する区立病弱特別支援学校の３校の連帯を深めつつ，今後の発展を願い，学校名に統一性をもたせて改称したことを３校全ての聞き取り調査において確認した。具体的には，東京と房総とのつながりを表すために，東京駅から房総半島の各地へ向かうJR線の特急列車名（内房線特急さざなみ号・外房線特急わかしお号・総武本線特急しおさい号）にちなんだ学校名としたということであった。このような他校と連帯した学校名の変更は，全国的に見ても多く見られることではないと考えられ，転地療養型の特徴的な教育形態の象徴とも言えよう。

他には，各校では，比較的古くから公開研究会・研究発表会等を数年おきに行っていることが沿革の中から確認された。教職員研修の充実を図るとともに，日々の校内研究の成果を外部に発表する機会を積極的に設けていた。東京都外に設置されている区立健康学園・病弱特別支援学校は，いわゆる小学校に準ずる教育課程を編成している。小学校における病弱教育の推進が叫ばれる中，田中（2020b）は，教職員研修の充実，とりわけ病気の子どもを対象とした授業研究はほとんど行われていない実態を明らかにし，その充実の必要性に言及している。しかし，本研究においては，区立健康学園・病弱特別支援学校での研究授業の実施が確認された。つまり，キャリア発達・心理的支援・基礎学力の定着・表現力の育成等の病気の子どもの特性を活かした学習指導の充実は，東京都外に設置されている区立健康学園・病弱特別支援学校においてかねてより研究と実践が蓄積されてきていることが伺え，今後は，その点に深く注目していく必要が示唆された。

また，各校共通して，数年に一度の大規模な施設設備の改修工事等が行われたことが示されていた。これは，校舎設備が老朽化してきている点や海岸沿いの立地で強風や塩害で劣化が早い点が推察される。田中・斎藤・奥住（印刷中）は，東京都外に設置されている区立健康学園・病弱特別支援学校の教職員への教育活動の課題に関する聞き取りの結果，学校・学園の課題として施設改修の必要性が挙げられていたが，本研究においても合致していた。森田・池本（2014）は，近年著しい健康学園の廃園理由として，施設設備の老朽化と維持費の高騰を挙

げているが，津波対策や地滑り等の自然災害への対策の必要性も考えられ，今後も施設設備の改修は，学校・学園の存続・発展とかかわることが考えられた。

４．３．特色ある教育活動

各校ともに，房総や伊豆の豊かな自然と少人数指導の利点を活かした特色ある教育活動が教育目標の具現化を目指して，実施されている実態が明らかとなった。体力向上や食に関する指導は，児童の生活習慣の改善に直結し，QOL向上につながる区立健康学園・病弱特別支援学校の根幹にある活動であろう。

また，特色ある教育活動の中には，４校全てが共通する活動と，各校が独自性をもって取り組む活動が見られた。具体的には，健康課題別の自立活動，海水浴，畑や田んぼで行う栽培学習，マラソン・持久走は全ての学校で取り組まれていた。一方，食に関する指導，海水浴以外の海で行う学習，地域との交流は，それぞれの具体的な取り組みは各校によって独自性をもって多様な取り組みがなされていた。転地療養型の教育形態をとる学校の詳しい教育活動の実態はあまり明らかにされておらず，基本的な生活習慣を目指す生活指導のみに注目されることが多いが（前田，2000），本研究においては，各校に共通する取り組みに加え，学校ごとに異なる特色ある活動が行われているということが示唆された。

今後は，各校に共通する活動と各校が独自性をもって取り組む活動の，それぞれを連絡会や発展著しいICT・ネットワーク技術を用いることで，各学校間の教職員や児童同士で共有し，さらなる特色を活かした効果的な教育活動を展開できる可能性が推察される。

４．４．心理的支援の必要性

特色ある教育活動として，心理的支援を多くの学園・学校が挙げていたことは注目すべき点である。多くの学校において，自己有用感・自己肯定感の向上を目指す活動，他者とのコミュニケーションや人間関係を円滑にするための指導，情緒的な安定を目指す学習が行われており，その必要性が伺い知ることができる。玉村・山崎・近藤（2012）は，これまで，病弱教育の範疇においてなされてきた寄宿舎と一体化した病弱特別支援学校における生活全般を通した教育活動は，病気の子どもたちを中心に，不登校や発達障害の特徴的な行動を示す子どもたちの生活の枠組みを整え，学部での学習と寄宿舎での生活教育によって，仲間とともに困難を乗り越えていくという点で貴重なものであることを指摘している。近年は，小児の精神疾患・心身症の急増とそれに伴う，病弱特別支援学校の在籍児童の病態の変化，小学校の通常の学級における対応の困難等が病弱教育の課題として挙げられている（上野，2018;全国特別支援学校病弱教育校長会，2020）。田中・斎藤・奥住（印刷中）は，区立健康学園・病弱特別支援学校の教職員に，教育活動の成果と課題について調査しているが，心身症の児童，罹患している病気の二次的な障害や病気を持つ児童，他者とのコミュニケーションに課題がある児童の増加とその指導の難しさを課題として挙げる回答が多くあり，他の病弱特別支援学校や通常の学級の傾向と重なる傾向が見られた。また，一方で，児童の自立に向けた社会的なスキルの獲得や自己有用感の向上が教育的な効果として成果を上げていることを指摘する回答が多くあった。これについては，同学年の児童同士，他学年の児童同士，児童と教職員，児童と地元住民とのそれぞれのかかわり合いの中で多層的に構築されていることが推察された。本研究においても，特色ある教育活動として心理的支援の具体が挙げられており，転地療養型という非常に特徴的な教育形態を鑑みると，学習・生活の指導・支援とともに，心理的な支援の充実を図ることの重要性が示唆された。

５．まとめ

本稿では，これまで取り上げられることの少なかった東京都外に設置されている区立健康学園・病弱特別支援学校に着目して，概要と特色を整理し，検討してきた。その結果，これまで長い歴史の中で学習指導や生活指導の実践・研究の構築がなされ，なおかつ，現代においても，病弱教育の意義に即した教育目標が掲げられ，具現化を目指して，学校・学園独自の特色を活かした児童の病気や教育的ニーズ・困難に合わせた教育が行われていることが明らかとなった。

寄宿舎で生活しながら学ぶという転地療養型の教育は，インクルーシブ教育・共生社会が進む中，減少の一途をただっている。しかし，本研究において指摘された点と，心身症・精神疾患・生活習慣病の増加，家庭的な支援の必要性の高まり等の病弱教育の今日的な課題の２側面から照らし合わせると，教育的ニーズ・困難の多様化・複雑化の中で，連続性のある学びの実現のためには，様々な設置形態の学校の存在は，非常に重要であり（北島・細川・真鍋・石田・宮寺，2018），東京都外に設置されている区立健康学園・病弱特別支援学校は，在籍児童数の減少や費用対効果の問題は否めないものの，それらの学校の存続・発展は，病気の児童の学びの場の選択肢の一つとして重要な視点となり得るものであることが推察された。

そこで，病弱教育・健康教育のセンター的な機能や生活上の配慮の必要な子どもへの対応のモデルを先駆的に果たすことが期待されており，区立健康学園・病弱特別支援学校のような転地療養型の教育形態をとる学校における一定の存在意義が示唆されたと言えよう。

今後は，本研究で得た基礎的な検討を基盤として，都外に設置されている区立病弱特別支援学校や健康学園に通学していた経験のある当事者やその保護者等に対して教育的効果を聞き取ることで，その存在の意義と今後の課題をより具体的に検証していくことが必要であろう。

付記

本研究を進めるに際し，現存する学校が少ない特殊な事情を踏まえた上で，多大なるご理解・ご協力をいただいた健康学園・区立病弱特別支援学校の教職員の皆様に記して深く感謝申し上げます。なお，調査時・論文執筆時に研究対象校の管理者及び本稿筆頭筆者の管理者に論文執筆の許可を得ている。

文献

中央区立宇佐美学園（2017）開園80周年記念誌

中央区立宇佐美学園（2020）https://www.chuo-tky.ed.jp/ ~usami-es/（2020年10月29日閲覧）

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2017）病気の子どもの教育支援ガイド. ジアース教育新社.

板橋区立天津わかしお学校（2018）学校要覧

板橋区立天津わかしお学校（2020）https://www.ita.ed.jp/swas/index.php?id=1310301（2020年10月29日閲覧）

葛飾区立保田しおさい学校（2018）学校要覧

葛飾区立保田しおさい学校（2020）https://school.katsushika.ed.jp/swas/index.php?id=hotashiosai_e（2020年10月29日閲覧）

北島善夫・細川かおり・真鍋健・石田祥代・宮寺千恵（2018）特別支援学校における教育課程ならびに指導法の現代的課題.千葉大学教育学部研究紀要，66(2)，121–126.

前田武彦（2000）子どもが変身する学校―消えてゆく健康学園.雲母書房.

宮島環・椿俊和・笹本明義（2019）小児気管支喘息コントロール状態のアセスメントと評価.小児看護，42(3)，289–294

森田友恵・池本喜代正（2014）東京都の区立健康学園の廃園に関する一考察. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要,37，191–198.

日本育療学会（2019）標準「病弱児の教育」テキスト.ジアース教育新社.

大田区立館山さざなみ学校（2018）学校要覧

大田区立館山さざなみ学校（2020）https://www.ota-school.ed.jp/tateyamasazanami-es/（2020年10月29日閲覧）

大谷みどり・岡田信之（2005）「健康学園」の教育を今すべての子ども達へ.保健の科学，47(12)，878–884.

玉村公二彦・山崎由可里・近藤真理子（2012）病弱教育の歴史的変遷と生活教育 －寄宿舎併設養護学校の役割と教育遺産－和歌山大学教育学部教育実践センター紀要，22. 147–155.

田中亮（2020a）病弱教育における現代的な課題と専門性. SNEジャーナル，26(1)27–43.

田中亮（2020b）小学校における病弱教育の指導法・教育課程編成に関する校内研修.病気の子どもと医療・教育，26，26–33.

田中亮・斎藤遼太郎・奥住秀之（印刷中）東京都外に設置されている区立病弱特別支援学校・健康学園における教育課程の編成と指導法の特色と課題.東京学芸大学研究紀要総合教育科学系，71.

上野広祐（2019）南房総200日の記録―子どもの世界が変わるとき―. 本の泉社.

上野良樹（2018）病弱特別支援学校における病類変化と支援の現状についての全国調査 . 小児の精神と神経，58(1)，47–54.

全国特別支援学校病弱教育校長会（2020）特別支援学校学習指導要領等を踏まえた病気の子どものための教育必携. ジアース教育新社.